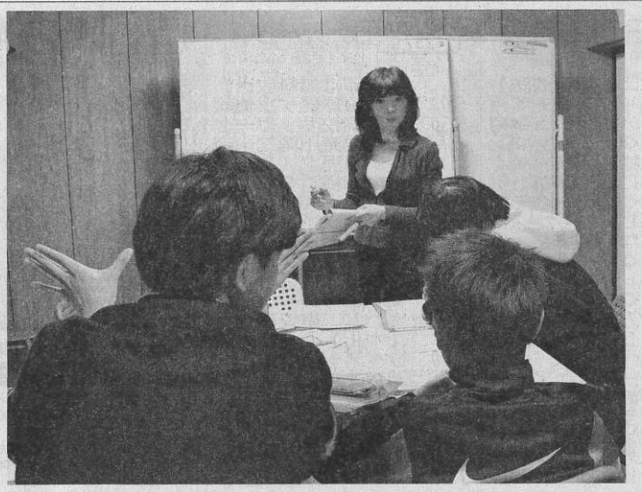
すべての子に学ぶ喜びを

川崎のNPO学習支援　受講の4人 高校進学へ

小中高校生らを対象にしたキャリア教育を全国で進めるNPO法人「キーパーソン21」（川崎市中原区）が、川崎市内の低所得家庭の子どもたちを対象とした学習支援に取り組んでいる。将来に希望を見いだすことが難しかった子どもたちは、それぞれの夢の実現を目指して勉強に励んでいる。



「こすわく」で学ぶ子どもたち。上級生（左）が隣の下級生にアドバイスすることも（2月、川崎市中原区で）

教育ルネサンス

「これはどうやって解くんだっけ？」

2月28日の夜、武蔵小杉駅（同）近くのマンション一室で「小杉わくわく学習室（こすわく）」が開かれた。教師役の「学習サポーター」を務める渡辺日奈子さんが、中学1年の男子生徒に問いかけた。生徒が数学の問題に頭を悩ませていると、隣にいた中3の男子生徒が「マイナスとマイナスを足すときはさ」と助け舟を出した。

代表理事の朝山あつこさんは2000年のNPO設立以来、子どもたちの個性や主体性を育む教育活動を続けてきた。その中で、いわゆる貧困層の子どもたちは様々な問題を抱え、勉学に向き合うことができない現状を目の当たりにした。

親が働きに出るなどして不在のため、家事を一手に引き受けながら幼い弟や妹の面倒をみる子。一家が狭い1部屋に暮らし、勉強する場所がない生徒もいた。中学に進学してもアルファベットやアナログ時計が読めず、九九も言えない生徒たちは「どうせ自分なんて」と投げやりだった。

「勉強する意味に気づいてほしい」と願った朝山さんは、市の協力を得て生活保護受給世帯の子どもたちに週4回、学習支援を行う「中原わくわく学習会（なかわく）」を始めた。活動に手応えを感じた朝山さんは、生活保護の受給基準を満たさず、公的支援の枠組みから漏れた子どもたちのため、15年からは週2回の「こすわく」もスタートさせた。

いずれも中学生が中心で、学校授業の補習やテスト対策などを指導する。NPOの特性も生かし、「好きなことと社会の仕事はつながっている」と学んでもらうキャリア教育も並行して行うことで、将来に希望を描けるように子どもたちの背中を押している。

学校になじめなかったという中3の男子生徒（15）は、「こすわく」に通うことで介護福祉士になりたいという夢を見つけ、志望していた県立高への合格を果たした。「わからないところがわかるようになるのが面白かった」と振り返る生徒は「高校生になったら、今度は後輩たちに勉強を教えたい」と新たな目標も見つけた。

この生徒を含め、「こすわく」の中3生徒4人全員が高校への進学を決めた。支援者も招いて今月7日に開かれたお祝い会で、生徒たちは「料理人になりたい」「保育とビジネスを結びつけた仕事に就きたい」などとそれぞれの夢を語った。

朝山さんは「勉強は夢の実現のためにある。子どもたちには目標に向かって力強く歩いてほしい」と目を細めた。

NPOでは勉強を教える学習サポーターを募集している。問い合わせは（044・431・0420）。

（高梨しのぶ）

新聞@スクール

相本紙

て報道されていく過程などを学んだ。

5年生は昨年10月、印刷工場で新聞が印刷される工程を見学した。これを受け、今月7日の出前授業では、読売新聞横浜支局の山本広海支局長が、新聞が印刷されるまでの取材や記事作成、紙面レイアウトといった流れをスライドなどをもとに説明。記者がどのように情報を入手して記事を書き上げていくのた時よりも深く知ることができた。新聞は身近にあるけれど、多くの手間がかかっていることがわかり、改めてすごいなと思った」と感心した様子で、山下小柚妃（ゆき）さん（11）も、新聞記者について「『大変だけど、やりがいがある』という話を聞いて、いいなと思った」と振り返った。

体育館で出前授業

豪州姉妹校とネットで交流

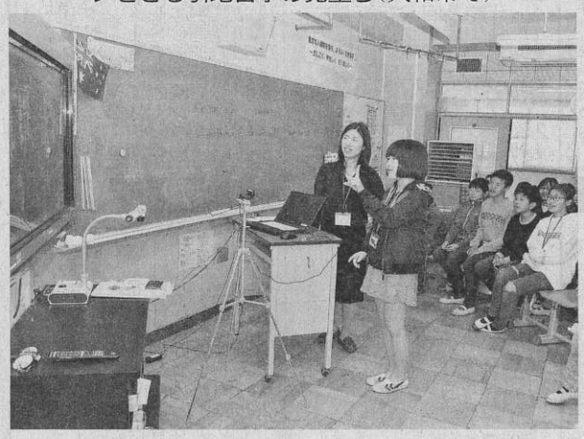
大和・引地台小 英語で会話

大和市立引地台小学校は15日、姉妹校提携している豪州・メルボルンの小学校と、インターネットを使った国際交流授業を行った。

引地台小は市の英語教育のパイロット校で、高学年の児童は年70時間の英語授業を2年間行ってきた。豪州セント・アンブローズ・パリッシュ小とは今月、姉妹校提携を結んだばかり。この日は引地台小の6年生66人が、通話ソフト「スカイプ」を使い、豪州の5、6年生28人と音声や映像で交流した。

児童らは名前や誕生日、やっているスポーツ、なりたい職業などを互いに英語で紹介。「Myhero is～（私のヒーローは～です）」というお題のスピーチでは、日本の児童がスポーツ選手やタレントを挙げたのに対し、豪州の児童が「ユーチューバー」と答え、教室が楽しそうな笑いに包まれた。

約30分の交流の後、児童らは「外国流の発音が学べてよかった」「聞こえづらくても、ジェスチャーが大切だとわかった」などと感想を発表。杉山由美校長は「生きた英語を学べたし、子供同士だからこそ感じ合えるものがあったと思う」と喜んだ。



豪州の児童と英語でコミュニケーションをとる引地台小の児童ら（大和市で）